

# 島貫兵太夫と日本力行会

## ——明治期日本キリスト教史の一側面としての「立身出世」試論——

相澤 一

### 概要

島貫兵太夫は、日本力行会を設立し苦学と渡米をサポートした牧師であり、当時、キリスト教界内外で非常によく知られた、しかし今日、日本キリスト教史においてはまったく触れられることはない人物である。本論は、序において、島貫研究の必要性と、その際我々が課題とすることを手短かに述べ、第1章で研究史を振り返る。第2章では、力行会が生まれた時代背景、第3章では島貫のバイオグラフィーを辿る。続いて、島貫の思想とスピリチュアリティに迫るべく、第4章は、彼の主張の中心をなしている霊肉救済の思想を、そして第5章は成功とキリスト教信仰との関係を、彼の言葉を追いつつ明らかにする。そして、第6章では、彼が当時の教会から排除された経緯と理由について述べ、最後に、島貫が様々な問題がありつつも、今日再評価する意義があることを論じる。島貫再評価を通して、我々は日本キリスト教史の問題と取り組む手がかりを得ることが出来るのである。

### 序

#### A 忘れられた島貫兵太夫

当方が長年にわたりご指導いただいた古屋安雄教授は、『日本のキリスト教は本物か』の「はじめに」において、この本では「若い世代にさらに研究してもらいたいことを書いてみた」として、日本の教会が「社会的キリスト教」であることをやめたこと、「オーソプラクシー」の問題、いわゆる「敗者」の視点、などを挙げている<sup>1</sup>。そして、田村直臣を始め、従来の日本キリスト教史の著作であまり触れられることのなかった人物を取り上げている。

確かに、従来の日本キリスト教史研究において、まだ本格的に手を付けられていない人物や事件、事柄は数多い。しかし、その働きの重要性や規模に比してあまりにも現在において取り扱われることが少ない人物や事項の極めつけは、本論で取り上げる島貫兵太夫（しまぬきひょうだゆう）と、彼が創設し主催した日本力行会（にほんりっこうかい）<sup>2</sup>であろう。

朝日新聞に掲載された彼の死亡記事にはこう書かれている。「氏は慶応2（1866）年寅年8月18日に陸前国名取郡沼本郷に生まれ、長じて基督教の洗礼を受けて、仙台神学舎に入り、東北学院英語神学部を卒業後、上京して日本力行会なるものを立て、一生を社会の為に捧げた。力行会の目的は日本の苦

1 古屋安雄『日本のキリスト教は本物か？ 日本キリスト教史の諸問題』（教文館、2011年）3～4頁。

2 ただし新聞や雑誌、さらに困ったことに力行会の出版物ですら「りょっこうかい」とルビが振られているものがある。しかし、「日本キリスト教歴史大辞典」の項目も「にほんりっこうかい」となっており、「りっこうかい」と呼ぶのが標準的であろうと思われる。



学生に自活勉学の道を与えて救済しようと云うにある。苦学部、渡米部、力行女学院、煩悶解決部、下女下男部等があって、凡そ東京と云わず苦学しようとする青年で氏の名を知らぬものはない」<sup>3</sup>。また、彼を「移民の神様」と読んでいる新聞記事もあり<sup>4</sup>、当時、彼の名は、渡米や苦学といった単語と結びついて、広く日本社会に知られていた。また、彼が主催した日本力行会も、最盛期には会員数一万人を越え、会誌『力行世界』は、一般書店で販売され、公共交通機関の車内に吊り広告が出されていたという。生前、島貫は、同時代人の植村正久をはるかに凌ぐ知名度を持っていたのである。

しかし今日、島貫兵太夫と日本力行会は、どちらも、『キリスト教大辞典』（教文館、1998年改訂第九版）に項目がなく、ウィキペディアにも項目がない（2015年7月）。また、ジャパンナレッジでは、島貫は1件の項目がヒットするが、日本力行会は0項目。CiNiiで検索してみると、植村正久が95件に対して、島貫兵太夫はわずか5件（2015年8月）。さらに、彼の墓所は東京都豊島区の染谷霊園にあるが、ここには多くの著名人の墓があるため、染谷墓地に眠る著名人リストが区の教育委員会によって作成されパンフレットとして配布されている。しかし、それにも島貫の名前はないのである<sup>5</sup>。

今日、島貫と力行会は日本キリスト教界のみならず、世間的にもまったく無名の、忘れられた存在となってしまう、と言わざるを得ないのが現状なのである。

## B なぜ今、島貫兵太夫か？

### ①日本キリスト教史研究の真空地帯（エアポケット）を埋めるピース

島貫と力行会は、先に紹介した新聞記事に書かれているように、主として若者たちの苦学力行を、そしてその達成を目指す一環として渡米をサポートし奨励したのであるが、その目指すところは、ずばり成功、そして立身出世であった。その活動の目指すところは、具体的には社会的成功であり、さらに具体的に言えば、経済的成功である。島貫は、それを目指すべく青年たちを励まし、支援したのである。「満天下の青年男女よ、小理屈を止めて富まん事を考えよ。……武士は食わずも高楊枝の空威張りをするを止めて花より団子の実利主義を採るべし。我が青年よ十分に富を造る事を考えよ。……幾ら考えても同じ事なり。よしと信ぜし事を断行して富を造る事をせよ」<sup>6</sup>、「一にも金、二にも金、と思つて……強者、富者、割合のよい種類の人となる爲、今に於いて逆境者は努力せねばならぬと思う。金を得ることに専心つとめる、何でも出来る事に手をつける……今の世紀はこれなくてはならない」<sup>7</sup>。島貫という人はこういうことを声高に語り、語るだけでなく、それをバックアップする団体を作った牧師だったのである。

現代の我々からすると、貧しい苦学生に苦学力行を奨励し、あるいは渡米を斡旋して、成功と立身出

3 朝日新聞1913年1月23日号。なお、本論で引用した文は、歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに、旧字体は新字体に、漢字表記の接続詞や指示代名詞、助動詞などは適宜平仮名に変換した。

4 読売新聞1926年5月8日号。

5 <http://www.sugamo123.com/photo-gallery-somei-reien-haihuannaizu-ura.html/> ちなみにこの墓地には田村直臣の墓もあるが、彼の名前はちゃんとリストに載っている。

6 『力行世界』第10巻1号。

7 島貫兵太夫『新苦学法』（警醒社、1911年）23頁。



世の手助けをする島貫と力行会の活動は、異様にすら見えるものであろうし、明治大正期における、キリスト教による貧困問題との取り組みの中でも、山室軍平、賀川豊彦といった人々の社会福祉的な形での取り組みと比べて、かなり特異なものと感じられであろう。そして、その特異という印象のせいか、広範な概説書である、近年の好著『日本キリスト教社会福祉の歴史』（日本キリスト教社会福祉学会編、ミネルヴァ書房、2014年）にも、島貫も力行会も、名前が出てきておらず、キリスト教社会活動の枠にすら入れてもらえていない。

しかし、明治という時代背景から見ると、実は彼のしたことは決してそれほど特異でもない。例えば、渡米について言うなら、アメリカの日本人教会が渡米者を援助するということは、実は西海岸の福音会を筆頭に広く行われていたことであり、一般の渡米案内書にも、アメリカに渡ったらとりあえずは現地の日本人教会を訪ねるように勧められていた<sup>8</sup>。しかし、明治期日本キリスト教史研究においては、海外→日本、つまり来日宣教師たちの活動については、『日本キリスト教歴史大辞典』（教文館、1988年）の出版を皮切りに盛んになり、古屋安雄『宣教師——招かれざる客か？』（教文館、2011年）のような本も出版されているが、逆方向の、日本→海外という、いわゆる海外移民においても、キリスト教会は大きな役割を果たしたのであるが<sup>9</sup>、今日ではあまり知られていない。

思うに、私たちの明治日本キリスト教史に関する知識や知見では、一種の真空地帯が虫食いのようにあちこちに生じており、そのせいで、知識の真空地帯、理解のエアーポケットなどの死角があちこちに発生しているのではないだろうか。そして、島貫と力行会の活動は、その虫食いを埋める重要なピースとなるであろう。

## ②明治のオピニオン・リーダーとしての島貫

明治大正期、特に日露戦争後に、雑誌『成功』がベストセラーになったことに象徴されるような、立身出世ブーム、成功ブームがあった。しかし島貫は、この成功ブームに便乗した人物ではない。彼は『成功の秘訣』という本を1892（明治25）年に出版しているが、これは、「成功を題名にしたもっとも早い成功読本」の一つである<sup>10</sup>。「成功」という言葉が、何かを成し遂げること以外、富や社会的地位を得ること、という意味で使われ始めたのは明治以後であるが<sup>11</sup>、島貫は、富や社会的地位を得るという意味での成功という言葉を日本社会に広めた一人である。彼はその後も、『忍耐の秘訣』（1892年）、

8 「友人なく知己なく、而して英語も解することが出来なければ方角も分からず、如何にして好いか途方に暮るものは、先ず日本人の旅宿に就て一泊すべしである。……唯に旅人宿のみではない、仏教青年会とか、又は基督教会などは、何人も喜んで宿泊させるのだから、毫も憂うるには足りないのである」（秋広秋郊、藤本西洲『海外苦学案内』〔博報堂、1904年〕60～61頁）。

「基督教の教会であるが、ここは何人でも喜んで投宿せしむるのみではなく職業の周旋もして呉れば、且つは英語夜学校などもその中に設けられてあるので、一面に於ては倶楽部たり、宿屋たり、一面に於ては又教会たり学校たりの観があるのだから、その待遇監督の行き届いて居ることは、到底他の下宿屋旅人宿の比ではないのである。故に苦学生の渡米者が就て依頼するには之等を尤も得策とするであろう」（同62頁）。

9 「向うの日本人基督教会では、色々の設備を爲して、学生などの世話をするのであるから……日本に在る教会などとは大いに趣を異にしたもので、決して狭隘な意味のもので無く、信者と不信者とに拘わらず、引き受けて親切に世話をします」（吉村大次郎『最近視察 青年の渡米 苦学者の天国』〔中庸堂出版、1902年〕50～51頁）。



『成功の秘訣：学生錦囊』（1901年）、『力行奮闘録』（1911年）、『新苦学法』（1911年）など、成功本を次々に出版しており、明らかに当時の成功ブームの牽引者であった。

また、同じ頃に渡米ブームもあった。渡米ブームの火付け役としてしばしば言及される、片山潜の『渡米案内』は、一週間で2,000部売れたという、当時としては一大ベストセラーであったが、他方、島貫の一連の渡米案内書によって渡米の志を与えられたと証言する渡米者もたくさんおり、日本力行会のサポートで渡米した人も数多い<sup>12</sup>。島貫が没するまでに世話をした会員の数は8,500人、在米会員3,000人に及んだという<sup>13</sup>。また、片山の『渡米案内』が出版されたのは1901（明治34）年8月であるが、島貫の最初の渡米案内書『最近正確渡米案内大全』が出版されたのはそれからわずか四ヶ月後である。また、片山が後に共産主義運動に傾倒し、渡米について語るのをやめてしまったのに対して、島貫はそれ以後も『最近渡米策』（1901年）、『新渡米法』（1911年）と、コンスタントに渡米本を執筆し続けている。

つまり島貫は、成功や渡米、そして立身出世に関して、ブームの尻馬に乗ったのではなく、むしろ、それらを積極的に世に広める働きをした、旗振り役、オピニオン・リーダーの一人であったのである。

### ③我々の課題

しかし、キリスト教の世界では、「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」（マタイ 6・24）という聖句を引用するまでもなく、立身出世や成功を目指すということと、キリスト教的生き方とは一致しない、矛盾するものである、という捉え方が一般的にあると言える。もちろん、キリスト教が常に一貫して富を罪惡視していたわけではないが、「<sup>1</sup>身を立て 名を上げ やよ励めよ」と歌うような生き方ではなく、アッシジのフランシスのような、立身出世やこの世的な成功の放棄がキリスト教的な生き方である、というイメージは教会の内外で強いものである。従って、「島貫の著作によく登場する『成功』の文字の裏には、島貫のいう成功は、社会的、経済的なものであったことが読みとれる。……しかしこの団体の基盤となっているはずの、キリスト教における靈的救済の色彩は極端に薄い」<sup>14</sup>、「こと力行精神に関してはその目的の宗教的基礎づけは必ずしも明確ではない」<sup>15</sup>といった評価は、しごく当然のものであろう。

もし、島貫が力行会を自身のキリスト教信仰と切り離して考えていたなら話は簡単である（例えば新宿中村屋の創業者の相馬愛蔵・黒光夫妻は二人ともクリスチャンだが、二人のキリスト教信仰と、パン

10 竹内洋『日本人の出世観』（学文社、1978年）107頁。

11 柳田國男は、成功とは「明治の新熟語」とであると語っている。『明治大正史 世相篇』（講談社学術文庫、2008年）420頁。

12 伊藤一男『北米百年桜（1）』（日貿出版社、1973年）27～28頁。

13 岩沼市教育委員会「岩沼市文化財だより」第3号（2009年）[http://www.city.iwanuma.miyagi.jp/kakuka/050300/050302/documents/3\\_000.pdf](http://www.city.iwanuma.miyagi.jp/kakuka/050300/050302/documents/3_000.pdf)（2015年12月24日アクセス）。

14 横田睦子『渡米移民の教育一葉で読む日本人移民社会』（大阪大学出版会、2003年）85頁。とはいえ、当時は金儲け目当ての、悪質な詐欺まがいの渡米斡旋業者も多数あったので、それらと違って力行会は「金もうけを目当てにはじめたのではなかった」（伊藤一男、前掲書27頁）と、力行会のルーツがキリスト教であるがゆえに金儲け主義の他の会とは違う、という評価もある。しかし、それだけでは、会の主張である成功や立身出世とキリスト教との関係の積極的弁証にはならないことは言うまでもない。



屋を開業したこととの間に特につながりはない)。しかし島貫の場合はそうではない。彼が主催した日本力行会のマークは、いくつかのバリエーションがあるが、その一つは、円形にレイアウトした「日本力行会」の五文字の周りを、「福音」、「苦学」、「植民」、「成功」の4語が囲んでいるものである。島貫にとって、立身出世とキリスト教、つまり、キリスト教信仰の持ち主が立身出世と成功を目指すことは、これはこれ的に分離した話ではなく、また、カトリックの聖職者のような、自身は結婚しないが平信徒の結婚は祝福する、といった風の二重倫理でもなく、一つとなって調和しているものなのである。



この、現代の我々からするといささか異様に思える組み合わせを成り立たせている彼の内面世界、スピリチュアリティを明らかにすることが、本論の目指すところである。そしてそれは、前述の、明治キリスト教の諸相の、今まで死角となっていた部分に光を当て、明治期日本人クリスチャンのスピリチュアリティ、あるいは信仰世界のあり方を垣間見る作業ともなるであろう。

## 1 研究史

島貫と力行会は、移民史を扱った文献の中にはしばしば登場するが、移民史の分野での専門研究は意外にもほとんどなされていない。では、日本キリスト教史研究の中ではどうかというと、まったく無視されていると言っても過言ではないのが現状である。

日本力行会がかつて主催していた雑誌のいくつかが近年相次いで復刻されたが、『救世』復刻版のカタログには、「そもそも宗教とは、キリスト教とは、伝道とは何なのかが厳しく問い直される現今、不二出版が『救世』を復刻する意義は大である」とあり、また、『力行世界』復刻版のカタログには、「この貴重な資料が広く利用されて、日本移民史研究はいうまでもなく、教育史やキリスト教史研究が進展することを願ってやまない」、「移民史をはじめキリスト教史、教育史、広く近現代史研究に供するものである」など、島貫と力行会の研究が日本キリスト教史研究という点からなされることを期待する言葉が並んでいる<sup>16</sup>。また、『救世』復刻版付録の冊子「解説・総目次・総索引」に掲載されている解説には「島貫兵太夫自身については……明治期のキリスト教の受容史からも研究がなされている」<sup>17</sup>とある。

しかし実際には、キリスト教史研究という文脈からなされた島貫研究は、相沢源七氏の『島貫兵太夫伝』（教文館、1986年）ほとんど唯一という状態である。しかし、氏の研究はまだ一次資料の閲覧もままならなかった時代のものであり、一次資料の整理で精一杯だったという時代的な制約の下にある。

当方の知る限り、立川健治氏の論文「島貫兵太夫と力行会——信仰・成功・アメリカ」<sup>18</sup>は、島貫の

15 同志社大学人文科学研究所「海外移民とキリスト教会」研究会編『北米日本人キリスト教運動史』（PMC出版、1991年）537頁。

16 <http://www.fujishuppan.co.jp/newbooks/%E6%95%91%E4%B8%96%E3%80%80%E5%85%A82%E5%B7%BB%E3%83%BB%E5%88%A5%E5%86%8A1/>から閲覧・ダウンロード可能。

17 『『救世』解説・総目次・索引』（不二出版、2012年）7頁。

18 『史林』第72巻第1号（京都大学文学部史学研究会、1988年）106～133頁。



キリスト教信仰と彼の生涯とを関連付けて論じることを試みた数少ない論文の一つである。その中で、氏は、島貫の、信仰を持つことの中で生まれた、天職探し（＝何者かであろうとならねばならない、という「煩悶」）が、明治の社会情勢および少年時代の体験（後述）が形成した彼の「資質」と結びつくことにより、貧民伝道という「天職（自己）の発見」へとつながり、それが「成功論者・島貫」を生み出した、と論じている<sup>19</sup>。この論文は、非常に教えられることが多かったが、惜しむらくは、立川氏は神学やキリスト教に関して知識がなく、「召命」と言う言葉も使っておらず（氏が論じていることは、島貫の「召命感」と言い表すのがふさわしいように思える）、成功を目指すこととキリスト教的生き方との関係如何という、根本的な問題も扱っていない。

思うに、島貫と力行会に関するキリスト教の側からの研究は、それが必要であると認識し、また期待していた人も一部にはいたが、しかし大勢において放置されていた分野である、と言えるであろう。しかし時代は変わり、島貫の著作の多くが国会図書館のデジタルライブラリーで読めるようになり、『救世』、『力行世界』といった力行会の定期刊行物も復刻版が相次いで出版されている。今までアクセスが難しかった一次資料が誰でも容易に閲覧できるようになり、島貫兵太夫および力行会に関する研究は、新しいステージに入った、と言うことが出来るであろう。

本論は、そうした資料を駆使して、島貫をキリスト教サイドから、神学的に研究してみる最初の試みの一つである、と言える。それゆえ、表題には「試論」とさせていただいたが、大言壮語がゆるされるなら、大木英夫、古屋安雄両氏が提唱した「日本の神学」<sup>20</sup>の、末端弟子によるささやかな一つの試みでもありたいと願っている。

## 2 時代背景——明治期の成功ブームとその担い手たち

### A 最初の担い手たち——没落士族の士族たち

明治4（1871）年、サミュエル・スマイルズの *Self Help* が、『西国立志編』という題名で翻訳出版されたが、「当時の若者に与えたインパクトは『ほとんど想像を絶するほど』大きかった」、「単に読まれただけでなく、そのストーリーを元に芝居が作られたり、教科書に採用されたりした」、「まさしく、明治時代の『聖書』の一つ」<sup>21</sup>などと評されており、当時の日本社会に大きな影響を与えたことが分かる。また、翌年、福沢諭吉の『学問のすすめ』が出版され、これまた当時の一大ベストセラーとなった。これらの著作は、人は生まれつきの社会身分（分限、分相応）を守るしかないのではなく、努力によって、あるいは学問によって、生まれつきの不遇を克服することが可能である、という意識変革を人々にもたらしたのであり、そういう意味で、まさにエポック・メイキングなものであった。

ところで、明治期、最初の日本人クリスチャンの多くが旧幕臣の朝敵とみなされた人々、あるいは旧幕臣といった没落士族であったことが多くの資料で指摘されている<sup>22</sup>。その理由として、『近代日本とキリスト教』では、官吏としての出世の道を絶たれた彼らは、「将来の発展を予測し、当時西洋文明の

19 同111～113頁。

20 「日本の神学」については、古屋安雄・大木英夫『日本の神学』（ヨルダン社、1989年）を参照。

21 E・H・キンモンズ『立身出世の社会史』（玉川大学出版部、1995年）24頁。



中心地であった横浜、東京、神戸等に来て英語を学び、西洋文化を摂取し文化的に指導権を握ろうとしたのですが、そこで図らずもキリスト教の教えに捉えられたわけです」<sup>23</sup>と説明されている。また、山路愛山は、『現代日本教会史論』で、なぜ没落士族がクリスチャンとなったのかについて、このように語っている、「戦勝者が何ほど宏量を示すとも、彼らはついにその自負を棄つることあたわず。……戦敗者の心に負える創痍はいまだまったく癒えず。かくて時代を調歌し、時代とともに進まんとする現世主義の青年が、多く戦勝者およびその同趣味の間に出で、時代を批評し、時代と戦わんとする新信仰を懐抱する青年が、多く戦敗者の内より出でたるはともに自然の数なりきといわざるべからず。すべての精神的革命は多くは時代の陰影より出ず。キリスト教の日本に植えられたる当初の事態もまた、この通則に漏れざりしなり」<sup>24</sup>。

しかし、この山路の記述は、分かりやすくはあっても正確に歴史的現象を捉えているとは言えない。なぜなら、没落士族こそ、実は「立身出世」というキーワードに最も敏感に反応した、まさに「時代とともに進まんとする現世主義の青年」でもあった、というのが歴史的事実だからである。

例えば、読者という視点から立身出世を扱った文学作品の研究を行った「明治立身出世主義の系譜——『西国立志編』から『帰省』まで」は、「山路愛山は『現代日本教会史論』で明治初年に基督教に入信した青年に幕臣の多かったことを指摘しているが、福沢の説く実学の効用を、その屈辱的な生活から体験的に把みとったのも薩長土肥以外の士族でなければならなかった」<sup>25</sup>と論じ、その理由を、「いわゆる没落士族の親達は、家名再興の希望をその子弟に託さざるをえなかったが、かれらの伝統的な価値観念が維新の変革によっていっきに崩落してしまったかぎり、次の世代に伝えるべき人生のガイダンスを、具体的には何ひとつ用意することができなくなっていた。……こういう生活環境に光を与えてくれたのが、『西洋事情』や『学問のすゝめ』であった」<sup>26</sup>と説明している。また、社会学研究の観点からも、「『学問のすゝめ』の「人は同等なる事」という主張にヨリ敏感に反応したのは、農工商の三民ではなく、薩長土肥の士族から屈従を余儀なくされたその余の士族達であった」<sup>27</sup>、「明治前半期の立身出世主義は、士族の子弟と士族を準拠集団とした上層庶民の子弟を中心にしたもの」であり、それは「没落士族としての剥奪感による」<sup>28</sup>、と分析されている。

22 例えば、久山康編『近代日本とキリスト教 明治篇』（1956年、創文社）54～56頁など。また、山路愛山は『現代日本教会史論』の中で、以下のように当時の様子を記述している、「植村正久は幕人の子にあらずや。彼は幕人のすべてが受けたる戦敗者の苦痛を受けたるものなり。本多庸一は津軽人の子にあらずや。維新のときにおける津軽の位地と、その苦心とを知るものは誰か彼が得意ならざる境遇の人なるを疑うものあらんや。井深梶之助は会津人の子なり。彼は自ら『国破れて山河あり』の逆境を経験したるものなり。押川方義は伊予松山の人の子なり。松山もまた佐幕党にして今や失意の境遇にあるものなり」（山路愛山『現代日本教会史論』[日本の名著40 中央公論社、1971年] 350頁）。

23 久山康編『近代日本とキリスト教 明治篇』56頁。

24 山路愛山『現代日本教会史論』351頁。

25 前田愛『近代的読者の成立』（岩波書店、2001年）119～120頁。

26 同118～119頁。

27 同119頁。

28 竹内洋『日本人の出世観』（学文社、1979年）16頁。



没落士族の子弟たちは全員が現実的な成功に背を向けてキリスト教に入信したわけではもちろんなく、努力や勉学による立身出世という理念の信奉者となった青年たちもたくさんいたのである（当然、その両方に同時に属している人たちもいたはずである）。

## B 成功ブームの、士族の子弟以外への広がり

では、それ以外の人々はどうかということ、古屋安雄教授は、日本のキリスト教がいわゆるインテリ層、知識階級にとどまり、一般庶民にまで広がらなかったことをしばしば指摘したが、立身出世主義も同じで、明治の初めから中期にかけては、いわゆる一般庶民は、立身出世は自分には無縁だと考えていたようである。「大多数の民衆にとって生物学的生存そのものが課題であり……勉強立身などまるで遠いできごとすぎなかった。……民衆にも金銭や地位への野心はあっても教育を通じてそれらを達成する（勉強立身）というセンスはなじみがなかったのである」<sup>29</sup>。

しかしキリスト教と違って、「庶民に立身出世主義が浸透するのは、明治後期以降」、「大正以降立身出世主義は庶民に広く浸透した」<sup>30</sup>。この変化、すなわち、苦学という考え方が1901～02（明治34～35）年頃になって広まったのは、義務教育が広がり、家庭が豊かでもなく、コネや旧藩からの援助も得られない層にまで、立身の夢が広まっていったからであった。1906（明治39）年には、「成功熱は田舎の青年にまで広まり、彼らが寝言に『成功！ 成功！』と叫ぶまでになっていた」<sup>31</sup>と報告されている。

島貫と力行会は、このような時代背景の中で誕生し活動したのである。

## 3 島貫兵太夫の生涯

### A 少年時代から回心、仙台神学校入学まで

島貫は、自伝的著作である『力行会とは何ぞや』の序文において「読む人によりては……成程この人の履歴や教育や家庭はこの事業をする爲に用意せられたのであると御分りになる方もあろう」<sup>32</sup>と語っているが、この言葉を引いてくるまでもなく、ある人の思想を理解するに際して、その人のバイオグラフィーは非常に重要である。幸い、彼は『力行会とは何ぞや』という自伝的著作を残しているし、また彼の協力者が記した文書もあるので、史料という点では恵まれていると言える。

島貫兵太夫は、1866（慶応2）年、仙台藩陸前国名取郡岩沼本郷（現宮城県岩沼市）に、仙台藩士の息子として生まれたが、戊辰戦争のあおりを受けて百姓に零落、小学校に通わせてもらうこともできず、「幼い無邪気な頭にもしみじみと亡国民の味を味ふた」<sup>33</sup>と回想している。そんな、没落士族の悲哀の中の子供時代、島貫少年の楽しみは、立志伝を読むことであった、と彼は当時を回想している。「元来私は少年の時代から立志編或は英雄豪傑の自叙伝から冒険探検記などを読むことが好きで、飯を食わな

29 竹内洋『立身出世主義』（世界思想社、2005年）124頁。

30 竹内洋『日本人の出世観』17～18頁。

31 E・H・キンモンス『立身出世の社会史』166頁。

32 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』（警醒書店、1911年）9頁。

33 同6頁。



くても好んで読みました」<sup>34</sup>。この経験は、後の島貫の人生の原体験となっていると確かに言えるのではないと思われる。

その後、成人してしばらく小学校の教員として勤めたが、そこでたまたま同僚にクリスチャンがいたことからキリスト教に出会い、押川方義より受洗（1884／明治17年）。伝道者となる志を与えられ、キリスト教の本格的な勉強のためキリスト教の本山（と島貫は思っていた<sup>35</sup>）アメリカへ行きたい、と考え、旅費の貯金を始めたという。アメリカがキリスト教の本山、というのも妙な話だが、確かに宣教師たちはアメリカから来ていたのだし、それが当時のキリスト教理解であった、ということか。あるいは、何かが島貫をアメリカへ誘っていた、ということか。それはともかく、そうこうしているうちに仙台神学校（現東北学院）が出来たので、渡米はやめてそちらに入学した（1886／明治19年）。

## B 煩悶——思想と実践の関係如何？

1891（明治24年）に卒業後、島貫は東北学院英語神学部に入學したが、在学中、「私に一大疑問が起って来て頗る苦しんだ。それは『哲学と宗教』『信仰と道理』の疑問であった。それが為めに身体を悪くした位であった」<sup>36</sup>。そのため、勉強もし、瞑想もし、断食もしたがどうにも解決がつかなかったが、松本総吉という牧師に「世の中の人を幸福ならしむるには理屈計りでは駄目です。理屈を語って居ったところで、決して人の幸福を増すものではありません」と語られ、「理屈などこねまわしているよりも人の幸福になるようなことを日々怠らずして着々とやるに限ると思った」<sup>37</sup>と、悟りを開くような経験をする。

さらに松島で二週間の断食瞑想をして、「凡百（すべて）の理論や想像では人生到底幸福は得難い。真正の安心立命は信仰でなければ駄目ということを知った」<sup>38</sup>。そして、その信仰とは、考えるものではなく、行う、あるいは生きるものである、と島貫は捉えたのである。「宗教は信ずるにあり、理屈でないと明確に分かり、且つ信仰は之を実行するにありと悟ってきた。……私の此の理屈的生活を変じて、实际的に人の幸福の為に尽くすはキリストの心である」<sup>39</sup>。

## C 東北救世軍と、最初の衝突

さて、かくして実践に目覚めた島貫が辺りを見回してみると、そこには実践の対象がいくらかでも見いだせた。「どうせ人の為に尽くすならば……一層面白く一層キリストの心を実行したい」<sup>40</sup>という気持ちから、貧民伝道をやってみたいと思い立ち、仙台市中の貧民窟を訪ね歩いたが、その余りの悲惨さに涙し、「如何にしても斯かる人々を捨てて置く訳には行かない、斯かる人の為に働くのは己の天職の様に

34 『渡米新報』第2巻2号（日本力行会、1907年）。

35 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』18頁。

36 同32頁。

37 同34頁。

38 同34頁。

39 同35頁。

40 同37頁。



思われてきた」<sup>41</sup>。そこで、「それには自分の体を大いに苦しめて救世軍の様にやらなければならぬ」と考え、春休みいっぱいかけて東北六県を回る「向こう見ずの連中七人」が集まり、東北救世軍なる巡回伝道隊が組織された。その中には、後に熱烈な説教者として知られるようになる木村清松、後に日ユ同祖論を主張するようになる酒井勝軍なども参加していた。東北救世軍の詳細については割愛するが、山室軍平による本物の救世軍の活動に三年先駆けて行われたこの活動は、東北地方における様々な救済事業の嚆矢となったらしい<sup>42</sup>。

しかし、この東北救世軍は、評価されるどころか、島貫は副校長ホーイから呼び出され、「我が派は我が派で救世軍は救世軍で全く別である、そういうものに関係してはいけなと云って大いに叱られた」<sup>43</sup>。このことについて、東北救世軍に参加した酒井勝軍の浩瀚な評伝『『異端』の伝道者酒井勝軍』を執筆した久米晶文は、「神学校を組織運営し、説教壇から説教中心の布教を行おうとしていた合衆国改革派教会（アメリカ・ドイツ改革派教会）にとって、貧民の中に入り込み、人々の霊と肉の救済を標榜する救世軍は、そのラジカルさにおいて一種『異端』に近いものとして映じていたのかもしれない」<sup>44</sup>と記している。

ともあれ、東北学院の宣教師たちの拒絶にあった島貫は、その拒絶を「不思議な事だと思って居た」<sup>45</sup>が、しかし、「何と云われても貧民伝道は止める事は出来ない、名が何でも実際に貧しき兄弟を助けて之に福音を伝えるならそれで我々は満足だと思っていた」<sup>46</sup>と、初志貫徹し続けた。しかし、この衝突はこれで終わらず、上京後も形を変えて継続されることとなる。

#### D 上京、救済活動の開始

1894（明治27）年、東北学院を卒業した島貫は、在学中に与えられた貧民伝道の志を仙台で実践すべく、月50円の資金援助を、神学部の教師で、アメリカ・ドイツ改革派教会から派遣された宣教師であるミラー氏およびスネードル氏に相談したところ、神学校で教えつつ仙台の教会で牧会するから月50円を支払うとオファーされた。これを聞いて、「スネードル氏もミラー氏も唯の宣教師である。貧民に対して何等の同情も無い」<sup>47</sup>と見た島貫は、「あなた少しも分かりません」、「分からない筈はない」といった問答の末、喧嘩別れのように仙台を離れて上京した。

上京した島貫は、東洋伝道、とりわけ貧民救済事業の拠点として、東京の下谷万年町で活動を始めようと考えていたが、押川の紹介もあり、東北学院つながりで、アメリカ・ドイツ改革派教会が日本で初めて建てた教会である日本橋区（当時）元大工町教会（後の神田教会）の牧師となり（1902／明治28年）、少しずつ苦学生救済に手をつけ始め、1897（明治30）年に本格的に苦学生救済に乗り出した。なぜ苦学

41 同37頁。

42 相沢源七『島貫兵太夫伝』（教文館、1986年）49～54頁。

43 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』41頁。

44 久米晶文『『異端』の伝道者酒井勝軍』（学研パブリッシング、2012年）76～77頁。

45 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』41頁。

46 同41頁。

47 同55頁。



生救済を手がけたのか、その理由については、彼はこう述べている、「日本力行会の元来の目的は即ち東洋、殊に日本の霊肉救済にある……然るに多年の実地研究の結果は、余をして東洋の救済事業が一朝一夕に於いて為し得るもので無い事を思わしめたる……単に救貧問題のみに就いて考うるもその範囲は甚だしく広大なもので、先ずその一部から着手するに非ざれば徒らに望みのみ大きくして何等実際に其の効果を見る事の出来るものでない」<sup>48</sup>。いわば、ターゲットを絞って一点集中的に取り組むことに決めたというわけであるが、苦学生にターゲットを絞った理由は、「最もその創立者の境遇に近くして、よくその内情に通じ、着手して比較的成算のあるところより之を始めるのが適当なことであろうと思った」<sup>49</sup>から、と彼は述べている。

その後、1910（明治43）年に神田教会を辞任し、力行教会を開始し、力行会に専念することとなるのであるが、この事情はなかなか複雑かつ重要なので、第六章で後ほど詳述する。

#### 4 霊肉救済——島貫の中心理念

かつて大木英夫教授は、古屋安雄教授の『宗教の神学』が上梓された際、「氏は風だ。構造、論理構造というよりは、力であり、インパクトである。もちろん台風も、ふりかえってみれば、たとい途中ふらふらしていても、そこには辿ってきた道がある。……観測者は、この台風の勢力はどうかに関心をもつだろう。……それは中心の気圧次第、台風の眼次第であろう」<sup>50</sup>と評している。島貫に関しても、先述した通り、煩悶の末に理論より実践という道を選んでいるのであるから、島貫の思想云々を論じるのは意味がないかもしれないし、ましてや彼の神学となると、論じるのはお門違いと言われるかもしれない。しかしそうではあっても、島貫が全くの恣意でデタラメに行動しているのではない以上、彼の実践の背後には何らかの思想があるはずである。そうであるなら、彼の活動が明治期日本キリスト教史において研究する意義がある以上、その背後にある思想（あるいは内面世界やスピリチュアリティと呼ぶほうが適切であるかもしれないが）の解明にも、一定の意味があるはずである。

『力行会とはなんぞや』の「序」に書かれている以下の文章は、島貫の思想を知る、よい手がかりとなるであろう。「例えば昨日迄隣の一青年が困って居ったが今や上京して力行会の世話で或る華族の書生となり都合よく勉強している……例えば一人の青年信者が田舎より上京、力行会に入り、忽ちに不言実行の信者と変じ、今迄の自己の境遇の何ぞそれ理屈計りでありしぞと悟った……中学を卒せし青年が、その前途の方針に迷い、将に危うき青年時代の悪弊に陥らんとせし時に上京、力行会に入り、今や米地に於いて真面目なる信者となり大活動の結果、毎月数十円、時として年の終わりに一千何百円の金をその父母に送り来れるの事実あり」<sup>51</sup>。ここでは、苦学を成し遂げることができた、空理屈でなく実行を伴うクリスチャンとなった、品行方正なクリスチャンとなり渡米して成功した、という三つの事例が列挙されている。これらの事例はみな、信仰→実行→成功、という、島貫の思想の特色を極めてビビッド

48 同116～117頁。

49 同117頁。

50 『形成』1985年11月号（椎の木会形成発行委員会、1985年）16～17頁。

51 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』4～5頁。



に描き出していると言える。これが鳥貫の思想の概要であり、極端に言えばすべてであるとすら言うのもいいのである。

## A なぜ霊肉救済か？

鳥貫の思想のキーワードは、何はさておき「霊肉救済」であろう。「吾が力行教会の主眼とする所は霊肉救済である。現今の教会は多くは殆んど霊の発達をのみ説いて他を顧みない。肉の救済については我れ関せずと云う有様である。若し現今の社会が……完全に経済状態を進めているならばそれでもよい。けれども日本の現代の状態は肉に於ける欠陥また甚だしいものがある。その霊性を救うにもそれが肉のことを慮ってやらねばその真の効果を見ることは出来ない」<sup>52</sup>。

鳥貫は、霊的な救済のみを主張する人は、幽霊を救済しようとしているに等しい、と言う。「人は幽霊ならば即ち以って肉を救うに及ばず、単に其の霊を救うを絶叫せば可なれども、苟（いやしく）も人とは肉と霊とより成り立つものならば即ち霊と肉とを救う事をせざる宗教は少なくとも親切の宗教にあらず」<sup>53</sup>。

しかし、「一般の教会は、どうしても霊性のみ説いている（言い換えれば手数のかからぬ方面のみ説いている）」<sup>54</sup>が、鳥貫は、それは伝道効果を挙げないだろう、と考える。「今飢えて死に臨んでいる人に天国の事を説いたとて何として耳を傾けしめることが出来よう。それを先ず差し当たりその肉の問題を解決してやって飢えを救うては飽かしめ、寒さを除いてやった上で、之に徐々道を説けば彼はここに本当の救いに入る事が出来るのである」<sup>55</sup>。それゆえ鳥貫と力行会は「肉と霊の両面の救いを説く」のである<sup>56</sup>。

こうした物言いは、物質的な面に関心を持つクリスチャンなら誰でも言いそうなことであり、格別目新しくはないかもしれないが、鳥貫はここからさらに進んで、こんな言い方すらする、「道徳なき経済上の成功者は決して永続せず。経済の根底なき道徳家は遂に乱るべし。……我等道徳の根底を宗教におき宗教の根源を聖書におけるものは正に左手に聖書を振り右手に十呂盤（そろばん）を取りて天下を救うの覚悟なくんばあるべからず」<sup>57</sup>。いささか即物的に過ぎるこのような言い方は、さすがに辟易させられもするが、それも今日的な感覚だろうか。とにかく、彼が物質的なことを無視してはならないと強く考えていることは明確に分かる。

---

52 同105頁。

53『救世』第2次第5巻62号（1908年）。

54 鳥貫兵太夫『力行会とは何ぞや』112頁。

55 同106頁。

56 同112頁。力行会の組織も、霊肉救済に沿った編成となっており、『救世』第2次第5巻74号（1909年）によると、肉の救いのために、渡米部、苦学部、修養学校、力行女学校、シンガポールシン学院北部分院、バザー部、渡米新報が設置されており、霊の救いのために、祈祷の友会、聖書輪講、キリスト教研究、聖書講義、伝道野戦隊、神田教会出席などが用意されていた。

57『救世』第2次第5巻第78号（1909年）。



## B 肉の救済＝自助の人とならしめる

この、肉の救済とは、島貫にとって、何はさておき金銭という意味での富であるが、島貫は、単にそれを与えるというのではない。「凡そ学生を世話するに金銭並びに物品を直接に与えて世話するは害多くして我も彼も益する所甚だ少ないのである。……直接に金品の補助を与うるは不慈悲にして、与えざるは大慈善である」<sup>58</sup>。施しのように金品を与えるのではなく、自力でそれを手に入れるようになることが重要である、という、『西国立志編』の冒頭の余りにも有名な「天は自ら助くるものを助く」をなぞるようなことが述べられる。「余輩は、衣食足って礼節を知ると云う事を真理として遵奉し、我が国民の肉の方面をも幸福ならしめん事を希望して、一方においては富を造らん種々の道を与えんとて……逆境にある青年即ち苦学生を鼓舞奨励して努力奮闘の人たらしめて其の境遇を脱せん事を世話す」<sup>59</sup>、「吾人は……唯彼等をして人に頼らず、自己の手足によりて其の逆境より脱し、其の運命を開拓する事を奨励誘導し、嘗（かつ）て之をして依頼の卑念を起こさしめざるなり」<sup>60</sup>。それゆえ、力行会も、「力行会は貧児救済所にあらず、開発所也。……苦学自活の道を与ふる所と知るべし。独立自存の念なき者は来るべからず」<sup>61</sup>と言われる。

この、奮闘＝力行→成功＝立身出世、というのが、島貫の「肉の救済」のイメージであると確認することができる。

## C 理論軽視・実践への傾倒

この、霊肉救済というゴールを達成するためには、理論的な事柄にあまりかかずらってはむしろマイナスとなる、と島貫は繰り返し語る。「一般の教会は多く理論に偏して教理に重きを置いているに拘わらず、この方は卑近でもかまわぬ、総て実行を之に伴い得るように説き而して現に実行に現すところの力行主義を主としている」<sup>62</sup>。それゆえ、自分はそれについては拘わらない、というのが島貫の立ち位置である。「神学説の如き宗教論の如き且つ又哲学上の問題の如き現今我邦に於て論ずべき事多しと雖ども、之を論ずるものは別に其人あり。余輩は唯伝道を論ずるを以て任となす」<sup>63</sup>。

島貫は、反知性主義とまではいかないが、それでも、実践を軽視し、肉の救済に重きを置かない教会や牧師に対する批判が、なんとなく反知性主義的な響きを持つてはいる。「人を救うは主の伝え玉えし単純の福音にて可也。此の福音こそ人を救うの真実力を有するもの也。人の説は一時人を屈する事を得べきもの直ちに反動又は棄てらるるを常とす」<sup>64</sup>。「基督教を哲学的、宗教的に研究すれば際限がありません。然し吾々は之を研究して宗教学者となる必要はない。我等は世界の平民として唯知行合一的に進んで行けばよい」<sup>65</sup>。

58『力行』第1巻第4号（1903年）。

59『力行世界』第10巻第1号（1913年）。

60『力行』第1巻第3号（1903年）。

61『力行』第2巻第8号（1904年）。

62 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』112頁。

63『救世』第1次第1号（1895年）。

64『救世』第2次第4巻第69号（1908年）。



この類の発言はたくさんあるが、要するに、「方法論もとより好し。然れども一の断行に勝る事なし。断行また断行、断行」<sup>66</sup>というわけである。

#### D 霊肉救済＝時代にあった伝道方法

また、島貫は、肉の救済にも注意を払うことは、それ自体が目的なのではなく、霊肉救済こそ、現代（明治大正期の日本）において求められているキリスト教の伝道である、と考える。「霊肉救済は二十世紀以後の大勢已むを得ぬキリスト教の伝道法である」<sup>67</sup>。なぜか？ それは、パンの問題が現代日本人の切迫した問題だからである。「我等基督教徒たるもの今の世は何を求めつつあるかを知らずして可ならんや。……今や我が国民の多くはパンの為に奔命に疲れ其の生命を之が為に消耗せんとする現象を知らずや。……徒らに高遠の空理を宣べたりとて直ちに罪を悔い神の愛を悟りて来たり信者となるものならんや」<sup>68</sup>

現状がこうである以上、「多数の人々に道を説かんとするにはその現状を十分了解して、その人々が了解する程度に於いて之を伝えなくては何等得る所は無い」<sup>69</sup>。それゆえ、「基督教を速やかに我が国に弘めんとせば言下に於ける我が国民の要求を直ちに與ふるにあり。其の霊の要求と其の肉の要求とを合わせ與ふるにあり。之を與ふる特種の教会あらば其の教会や発達すべし」<sup>70</sup>。

### 5 立身出世・成功とキリスト教

さて、我々は、島貫の霊肉救済について、肉の救済が必要であり、それは自助の人となり、成功し立身出世することによって達成されると彼は考えている、ということを見た。しかしそれならば、なぜキリスト教がそこに必要とされるのだろうか。我々の常識的な感覚では、クリスチャンイコール自助努力の人ではないし、逆もまたしかりである。怠け者のクリスチャンもいるし、自助努力に励む無宗教の人もあるはずである。次に我々は、なぜ、我々は成功にキリスト教が必要なのか？ ということについて見てみることにしよう。

#### A 信仰は忍耐の原動力

その理由は、第一に、信仰が成功まで耐え忍ぶ忍耐力を与えるからである。

彼はそのものズバリ『忍耐の秘訣』という題名の本を書いており、忍耐力こそ成功の鍵であることを繰り返し語る、「『世界は忍耐者の所有なり』とは実に忍耐力の価値を説き得たる妙覚の金言なり。……日に三唱せよ、『世界は忍耐者の所有なり』と。忘る勿れ此の千古不摩の金言を」<sup>71</sup>。忍耐こそ成功の鍵、

65『救世』第2次第5巻第81号（1909年）。

66『救世』第1次第2号（1895年）。

67 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』72頁。

68『救世』第2次第4巻第63号（1908年）。

69 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』107頁。

70『救世』第2次第4巻第63号（1908年求）。



というのは、『西国立志編』でもすでに主張されていることであり、目新しいことではまったくないが、そのためにはキリスト教信仰が必要である、というのが島貫の特徴である。「信仰とは何ぞや。未だ得ざるものを已に得たるが如く、未だ見ざる所を真事（まこと）として已に見たるが如くに深く信じて少しも疑わざるの特性、即ち成功の大敵なる狐疑の性質なきを見る」<sup>72</sup>。それゆえ、忍耐力の鍵は、信仰だ、と彼は考えるのである。「宗教的信仰の強きものは忍耐力に富む。信仰の強きものは即ち意志の強きなり」<sup>73</sup>、「勝利は只信仰を木鐸に取りて憤闘する人にもみ与えらる」<sup>74</sup>。同じことは、渡米志願者に対するアドバイスとしても語られる、「必ず成功せんとは聖書を研究して十分に了解せば之を信じて真正の信者となりて渡米する事である。……決心をして益々堅固ならしめ不動の人たらしむる者は実は天父の愛を確信して艱難辛苦に忍び失敗及び災害に感謝し絶えず希望を以て活動し得る者、独り真正の基督教徒にして之を能くすべし」<sup>75</sup>。

## B 信仰は墮落を防ぐ

第二に、島貫によれば、信仰は墮落を防ぐ。当時、多くの若者が地方から都会へと上京したはいいが、誘惑から悪習に染まり、志半ばで道を踏み外していく、ということが起こっていた。それは、昔も今も同じお決まりの道であり、信仰はそれを防ぐ力がある、と島貫は考えていた。「青年をして都会に出て来たりし当時より之が監視を為し自営自治自学の途を得せしめ、而して基督教の深味を注入し自重自尊の精神を鼓吹し以て斯くの如き不良青年の続出を防ぐ事を得ば自らの天職に叶う目的を達したるものと思う」<sup>76</sup>。また、渡米した後は、真面目に教会の礼拝に出席することが墮落を防ぐ、という勧告がされる。「何れの処に至るも必ず教会に出席して聖書研究を勉むべし。米国に於いては墮落せし悪漢を除くの外には心靈上の発達の為に殊に日曜日を定日とせり。……悪友並びに諸種の誘惑は諸君を去るべし」<sup>77</sup>、「青年の墮落に感染せぬ用心は、その教会に出入りしているより外無い。……教会に欠席せず、祈り、バイブルを読み賛美を唱え説教を聴いて居れば良心の刺激も相応に有るから、悪い方を避けるようになるであろう」<sup>78</sup>。

## C イエス・キリスト＝ロール・モデル

第三に、イエス・キリストは強き意志と忍耐とをもって成功することの最高のロール・モデルである、と島貫は語る。

「イエスは実に我が理想的の成功者なり」<sup>79</sup>、「然り、彼は其の功を成せり。而して世界成功者の王と

71 島貫兵太夫『忍耐の秘訣』（警醒社、1892年）5～6頁。

72 『力行』第1巻第4号（1903年）。

73 島貫兵太夫『忍耐の秘訣』33頁。

74 『救世』第2次第5巻74号（1909年）。

75 島貫兵太夫『最近渡米策』（日本力行会、1904年）11～12頁。

76 『力行世界』第10巻第10号（1913年）。

77 島貫兵太夫『最近渡米策』101～102頁。

78 島貫兵太夫『新渡米法』（博文館、1911年）16頁。

79 島貫兵太夫『成功の秘訣 学生錦囊』（警醒社、1901年）47頁。



なれり」<sup>80</sup>。確かに、「日々困難に遭遇して全く勝ち得る事は誠に困難」ではあるが、「然れども全く失望す可からず。之れに勝てるものあり。ナザレのイエス即ち其人なり。此れ我等の希望にあらず哉」<sup>81</sup>。

この立場からすると、聖書を読んでイエス・キリストを学ぶということも、こんな効用があるものとされる、「イエス・キリストは実に熱血至誠の烈士なり。高貴仁愛の君子なり。之を見、彼を聞き、豈に奮起せざるべけんや」<sup>82</sup>。それゆえ、「諸君は奮起してイエスに従えば其の決意必ずイエスの如くに至らん。……イエスに來たりて彼を仰ぎ見よ。識らず思わざるの中にイエスの如き至強の決意者とならん」<sup>83</sup>というわけである。

まるでイエスに従うと世俗的成功が得られると語る、アメリカ流のシンプルナリバイバル集会のようでもあるが<sup>84</sup>、もちろん、島貫はクリスチャンとして、「キリストは之れ等 [= 人類] の肉霊の救済主なる事を信ず」<sup>85</sup>という信仰を抱いていることはもちろんであり、靈的な面を無視しているわけではない。しかし、島貫流に言えば、イエスは靈的な生のみならず、肉的な生、つまり地上における生をどのように送るか、という点でも私たちの助け手であり導き手である、ということなのであろう。それゆえ、伝道についても、「キリストの柔和を説くよりもキリストの精神決意を説く」<sup>86</sup>と島貫は言うのである。

#### D 天職論

ところで、島貫はしばしば、成功を否定する発言もしている。例えば、「世の事業は肉の為なるが故に其の報ゆる所の俸金も又肉を安んずるには餘りあるべし。我等は靈を重んずるが故に目に見るべき俸酬を得る能わず」<sup>87</sup>、「我等人類は唯神を目的として進むべきものであって、決して名誉や金銭や情欲やを目的として進むものではありません」<sup>88</sup>などである。まるで、自分が今まで言っていたことを全否定するような発言であるが、果たしてこの矛盾は彼の中でどう解決されているのだろうか。

島貫は、「金銭と名誉とにて安心と平和とを求めん事を念ふは妄念也。艱難と辛苦と沈思熟考と祈りとを経て神に近づくべきものなる」<sup>89</sup>と言っているのも、あくまで霊肉救済の一翼としての苦学力行、

80 島貫兵太夫『成功の秘訣 青年錦囊』（高岩堂、1892年）32頁。

81 島貫兵太夫『忍耐の秘訣』39～40頁。

82 島貫兵太夫『成功の秘訣 青年錦囊』33頁。

83 同48～49頁。

84 実は、島貫のこうした発言の背後には、アメリカから輸入されたシンプルナリバイバル的キリスト教の影響がある可能性もなくはない。19世紀後半のアメリカは第三次リバイバルの最中であり、東北救世軍以来の島貫の親友である酒井勝軍と木村清松はムーディ聖書学院で学んだ経験があるなど、アメリカのリバイバルに関する情報が島貫の耳に入ってきてはいたであろうし、そこから島貫がなんらかの影響を受けた可能性は大いにある。しかし、影響を特定することは、おそらく不可能ではないかと思われる。

また、イエス・キリストに意志の強さを見るのは、明治期の青年には広く見られたことのようにである。例えば、『西国立志編』のある読者は、若い頃にバイブルを読んだことがあり、「殊に基督の自信力の強いのが気に入った」というエピソードが紹介されている。石井研堂『中村正直伝：自助的人物典型』（成功雜誌社、1907年）76頁。

85 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』116頁。

86 『救世』第1次第2号（1895年）。

87 島貫兵太夫『福音の勧め』（警醒社、1901年）77頁。

88 同82頁。



というのが彼のイメージなのであろう。それは、先に見た、信仰によって忍耐し成功する、という、素朴な信念とも一致する。そして、その背後には、天職という考え方があるように思える。それは、例えば、「吾れ等は各々神より与えられたる天職あるを信じ、その天職を成功せん為に奮闘するを人生の目的と信ず」<sup>90</sup>、「人は誰でも一生の間になさねばならぬ天職と云うもの有るべし。人の真事業は其の天職を果たす事である」<sup>91</sup>といった発言の中に見られる。島貫による、イエスとニコデモとのやり取りにおける「新しく生まれる」という言葉の解説も、この天職論に沿って解釈できるであろう、「我れ生きるにあらず事業我になって生きるなり……先きには私を中心として運動せり。今は事業を中心として運動するに至れり。先きには最高至貴の者として己れを崇拜したり。新しき我は即ち事業を崇拜するなり。否な事業は我にして我は即ち事業となりて旧き我れなるもの死して事業尾の肉魂なる新しき我生きてあるのみ」<sup>92</sup>。しかし、忍耐に比べると、転職論はそれほど強張されてはいないことは確かである。島貫は、このような、論理的整合性云々ということにはあまり興味がなかったのかもしれない。

## E 成功を妨げるもの＝力行不足

以上のことから、成功や立身出世が出来ない、失敗する原因は明らかであろう。島貫にしてみれば、自ら助くるの気概がない、それゆえ力行が足りないことが致命的なのである。「労働は成功に至るの道である。働く者には成功を与え愈れるものに何ものも与えざるは天の法則である」<sup>93</sup>と考える島貫にとって、成功しないのは単純に力行不足が原因なのである。島貫自身の筆によるものではないが、『救世』に「人身腐敗の一因は依頼心を生ずるにあり」という特集記事が載ったことすらある<sup>94</sup>。

この点、日本の若者に島貫は大いに不満を感じている。「日本の青年は其の希望甚だ小さく、小成に安んず。……日本の青年は小欲望……日本の青年は小細工を好み……日本の青年は依頼的他動的の人」<sup>95</sup>。

ところで、これは島貫がことさらに日本人を低く見ていたわけではない。明治の詩人、萩原朔太郎は、『孤独者の手記から』において、「労働の讃美は、近代に於ける最も悪しき趣味の一つである」<sup>96</sup>と言っているが、当時、成功、立身出世と発奮した人が多くいる一方で、それについていけない人——発奮した人たちにしてみれば、まさに日本社会のマイナス要因でしかない人——が多くいたのも事実なのである。

明治期に広く読まれた渡米案内書の一つである『海外苦学案内』には、渡米しても鳴かず飛ばずで成功できない人について、こんな記述がある、「その原因とも言うべきものを仔細に考うれば外でもない、怠惰、不規律、不誠実等の分子が、元来我が国人として殆んど習風のようになっている」<sup>97</sup>。他にも、「彼

89 同68～69頁。

90 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』116頁。

91 島貫兵太夫『成功の秘訣 学生錦囊』71頁。

92 島貫兵太夫『忍耐の秘訣』19～20頁。

93 島貫兵太夫『成功の秘訣 学生錦囊』79頁。

94 『救世』第2次第5巻第82号（1909年）。

95 『力行』第1巻第4号。

96 『萩原朔太郎全集 第五巻』（筑摩書房、1976年）263頁。

97 秋広秋郊・藤本西州共著『海外苦学案内』（博報堂、明治37年）87～88頁。



我が習俗を対照してその劣れる点を指摘すれば……堅忍不拔の気性に乏しく、着実誠意に勤勉すれば必ず成功すべき充分の見込みがあるにも拘わらず、順序を踏んで終局の成功を取得することが出来ないのである」<sup>98</sup>、「要するに、彼の地に於ける苦学生が必ず成功すべき運命に在りながらも、尚お往々失敗に終わる如きは、畢竟彼等に勤儉独立の気風が乏しいのと、それに、堅忍不拔の精神がないからだと言って差し支えないのである」<sup>99</sup>など、日本人の根性無しぶりは、特に当時の渡米推進派の人たちにとって、頭が痛い、また苛立たされる問題であった<sup>100</sup>。

島貫は、そのような国民性が、日本が飛躍しない一大原因であり、「身を修むる前に心底を大に改革せざる可からざる」と考えるのであるが、<sup>101</sup>そのためには、ただクリスチャンになるだけではダメで、島貫の目からすれば、日本国一大発展の阻害要因となる輩は、教会の中にも見出される。いや、むしろ教会の中の方がたちが悪いとすら考えていたふしがある。

以下の記述は、島貫が当時の明治キリスト教界を見ていた「眼差し」を知ることができて興味深い、「柔弱で女に甘いとか遊怠の人とかは日本人の未信者からも厭やがられ米人からもミッションボーイとして卑下されている。ミッションゴロと云って転々としてその間に一身を持ち扱っているものがある。為めに耶蘇信者はどうせ碌な事は出来ぬと思はれて同胞間には鼻つまみとなっているものが、どうして米人間に働けるものか」<sup>102</sup>。

島貫にしてみれば、たとえクリスチャンであっても、道徳的にだらしない者、怠け者、つまり力行精神のない輩は我慢ならない、ということであろう。しかし、先に見たように、成功まで苦難を耐え忍びしかも墮落しない真の力行精神はただクリスチャンだけが持つことができる、というのが、彼のスタンスである。それゆえ、力行会では、会員は聖書講話や礼拝に出席することが義務とされていたのである<sup>103</sup>。

## 6 当時の教会による島貫排除運動

### A 神田教会における迫害と追放

以上、島貫兵太夫と日本力行会について、島貫の中心にある、信仰によって堅忍不拔の忍耐力を与えられ、力行奮闘の末ついに成功するクリスチャン、という理念を中心に、ごく簡単にスケッチしてきた。変わったキリスト教活動、という感想を持たれた方もいるであろうし、明治の成功ブームを背景に、山

---

98 同91頁。

99 同94頁。

100 ちなみに、世間では、日本人は勤勉な国民性である、ということになっているようであるが、それは都市伝説の如きもので、戦前の日本人は（戦後も？）勤勉とは程遠かったということが、近年の日本人論では明らかにされている。例えば、パオロ・マッツァリーノ『反社会学講座』（筑摩書房、2007年）97頁以下、大倉幸宏『昔はよかったと言うけれど』（新評論、2013年）87頁以下、橋本毅彦・栗山茂久『遅刻の誕生』（三元社、2001年）3頁以下などを参照。

101 島貫兵太夫『忍耐の秘訣』18頁。

102 島貫兵太夫『新渡米法』15頁。

103 伊藤一男『北米百年桜（1）』64頁。



室軍平や賀川豊彦とは違う形で社会との取り組みをした人、あるいは、いささか短兵急に実践を急ぎ、神学的には深みがない人、という感想を持たれた方もおられるであろう。恐らく、そのあたりが、「普通」の評価なのではないだろうか。確かに、立身出世とキリスト教の関係は、いろいろ論じているにもかかわらず、率直に言って、つぎはぎという印象を受ける。しかし、現在の日本のキリスト教界では、こういう普通の評価が島貫にはなされず、あたかも黒歴史の如く、完全に忘れられた存在とされてしまっているのが現実である。

もちろん、それにはいろいろな理由があるだろう。しかし、島貫を明治日本キリスト教史という文脈に置いて考える時、看過してはならないのは、島貫が植村正久の派閥に属する人々と、アメリカの宣教師たちから迫害され、最終的には当時の日本プロテスタント・キリスト教界から排除された、ということである。

牧師が社会事業を行うことについて、とやかく言う者がいるのは当然であろうし、実際、島貫もいろいろ言われた。国会図書館デジタルコレクションの、島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』には、著者名の横に「大サギ」と落書きしてあるが<sup>104</sup>、他にも「内部の精神を知らざる人は島貫氏を目して投機師と見做したでしょう。或は教会の牧師として職責上如何などと迫害的批評も一時はありました」<sup>105</sup>、「其の当時宗教界に於ける世論は、島貫は大山師である、大偽善者である、宗教家の風上にも置けぬ奴であるとの声甚だやかましかった」<sup>106</sup>、「時に或は苦学生に同情すること篤きに過ぐるがため、或は移民事業に尽力したる為に兎角の世評を受けたこともあった」<sup>107</sup>などの言葉が力行会の機関誌に見られる。当時、島貫がかなりの批判を受けていたことが伺える。

しかし、島貫の場合、それだけでなく、教会の中で、植村派の人々から、また、自身のルーツである東北学院の母体である、アメリカ・ドイツ改革派教会からの排斥を受けたのである。

島貫は『力行会とは何ぞや』の中で、こう語っている、「波米を奨励する事は悪い事に云った者もあった。……余が牧師の職を持ってこの様の事をするのを悪い事、或は罪惡でもなす様に云った人もあった。最も新しい知識のある米国派のクリスチャンでさえそうであった」<sup>108</sup>。

この、「最も新しい知識のある米国派のクリスチャン」とは誰のことであろうか。島貫は上京後しばらく神田教会の牧師をしていたが、神田教会は次第に「島貫一派を日基容れ得ぬようになっていた」<sup>109</sup>と報告されている。また、「神田教会にありて、植村派の人々と戦いて屈せず力行教会を開かれました」<sup>110</sup>という証言もある。植村正久自身はさておき、植村シンパの教会員たちが、島貫批判の急先鋒であった。

さらに、「教会の方では、余が力行会を経営していると云う事から色々な口実を持って、排斥の声を洩らす者（六人）があるようになった。牧師は日曜の説教と、水限日の祈祷会を熱心にやって居ればよ

104 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/825309/>

105 『渡米新報』第2巻第3号（1907年）。

106 『力行世界』第10巻第10号（1913年）。

107 同。

108 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』73頁。

109 立川健治「島貫と力行会」129頁（傍点筆者）。

110 『力行世界』第10巻第10号（1913年）。



いと思っている連中は、余が他に此の苦学生を世話する事を何か野心でもあって経営している様に見たものと思われ、その何れかを止める様にと迫るようになった。牧師としての俸給を与えられない事も数カ月続いた」<sup>111</sup>。この俸給問題については、島貫夫人である島貫千賀が、以下のような回想を残している、「力行会は段々人も加わり発展したが、社会事業をやる事は伝道に背くように考える者があり、迫害を蒙った。神田の教会の牧師であったが、東北学院のミッションの人が、力行会をやめねば俸給をやらぬとて、収入を奪われた」<sup>112</sup>。「東北学院のミッション」とは、アメリカ・ドイツ改革派教会のことであるが、その宣教師たちは、島貫の恩師であり、また東北救世軍の活動を叱りつけた人たちでもある。彼らが、今や東北を遠く離れて活動している島貫の活動を妨害してくるというのも考えてみれば空恐ろしい話であり、なぜそこまでする必要があるのか、正直、理解に苦しむところでもある<sup>113</sup>。

ともあれ、島貫と、植村シンパの教会員たち、そしてアメリカ・ドイツ改革派教会とつながりがある人たちとの間で軋轢があり、それが島貫の神田教会辞任を結果することとなったのである。

## B 植村正久と島貫兵太夫

先に、植村シンパの人々が島貫排除運動を行ったことを記したが、では、植村自身はどうなのか、当然興味が湧くところである。今回、植村正久自身が島貫について何か語っている文章を発見することは残念ながらできなかったが、いくつか興味深い記述は見つけることができた。

植村は、島貫のことは当然知ってはいたし、会誌『救世』には何度か寄稿してもいる。しかし、力行会についてはあまりいい感じを持っていなかったのか、『救世』が力行会誌『力行世界』に統合されてからは一切寄稿はしていない。それどころか、『救世』以後の島貫を、あたかも黒歴史のように扱っているのである。「島貫兵太夫は勃々たる覇気と、抑ふるべからざる企業熱を抱いて上洛し、伝道に従事し、貧生養育所を設け、書籍を出版し、雑誌を発行する……同氏編集の雑誌『救世』は、勉強と負けぬ気とを以て充満したれど成功の之に伴わざりしぞ是非なき。余輩は其の筆太なりう題字を記憶するのみなるを遺憾とす」<sup>114</sup>。

なぜ、このような冷たい扱いをするのかははっきりはしないが、植村は、救世軍について、日本には不要のものと考えており<sup>115</sup>、東北救世軍についても、妙に意地の悪い記述をしている<sup>116</sup>。従って、彼の思いは、救世軍も東北救世軍も、また島貫も受け入れなかった東北学院のアメリカ・ドイツ改革派教会の宣教師たちと同じだったのかもしれない。しかし、これは現時点ではあくまで推測の域を出ない。

111 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』81頁。

112 『山室軍平選集別巻追憶集』（山室軍平選集刊行会、1954年）230頁。

113 ちなみに、島貫の東北学院の同窓であり、協力者・友人である酒井勝軍も、東北学院普通科卒業後、英語神学部に進学するよう勧められたが断り、「神学部には進まないが、説教ではなく讃美でもって伝道したい」と言ったところ、「宣教師某」から「君は異端なり、背教者なり」と断じられたという（久米晶文『「異端」の伝道者酒井勝軍』90頁）。この件について、久米は「教壇布教もしくは説教台布教をこととするミッション特有のもので、民衆のなかに入り込んでいく救世軍運動を『異端』に近い『別派』と断じた発想とどこかでつながっているであろう」（同90頁）とコメントしている。

114 佐波亘編『植村正久と其の時代 第三巻』（教文館、1938年）417頁。



## C 既成教会批判

この神田教会牧師辞任のやむなきに至ったのと前後して、従来の霊肉救済論の流れで、現在の教会を批判する言葉が、以前より多く見られ、また、心なしか舌鋒も鋭くなる。「あり来たり旧き方法を固守して天下伝道の方法これより勝れるものなしと頑張るを以て最も宗教家らしきものと誤解する勿れ」<sup>117</sup>、「人間は種々なる傾向を有し、我等は其の傾向に従って之を利導して之を神の国の人たらしめんとせり。……唯単に16、7世紀の伝道方法を固守するものは自ら枯死するに至るべし」<sup>118</sup>、「日本に於ける宗教家の活動振りを観ると十中八九凡て唯精神界の事をのみ云為（うんい）して、肉の事は恬（てん）として顧みぬ。中には気付いても其の救済の煩累を厭うて気付かぬかの風を装うているのかとも見える。要するに彼らの脳中には、斯かる勤めは、牧師、伝道師の為すべき圏外のものだという観念が、冷たく横たわっているであろう」<sup>119</sup>。

また、反知性主義的・反神学的な発言もその厳しさを増す。こちら、「吾人は思う、今後の宗教家は、小理屈を云ってのみ居る可きものではない。霊の救いを説くと同時に肉の救いをも與えずしては、其の任務を果たしたとは云えないのである」<sup>120</sup>、「我が基督教会議論多き団体は多くあらざるべし。理屈を知って居る事恐らくは基督教徒に及ぶものなからん。而して之を成し遂ぐるの意志の薄弱なるに到って天下又此の団体に及ぶものなからん」<sup>121</sup>といった調子である。

## 7 今後の課題——島貫再評価から見えてくるもの

### A 島貫の限界

我々は今日、そもそも島貫を再評価する必要があるものであろうか。あるとしたら、何を、どのように再評価するべきなのであろうか。

島貫は思想においても行動においても、多くの短所や欠落、あるいは時代的制約を抱えている。神学的な議論に深みがないことについては、言うまでもない。主張らしい主張は「霊肉救済」くらいで、当時の教会があまり主張しなかった肉体的救済を強く言うことと、その流れの中で渡米や苦学力行を強調し

115 「日本の諸教会は、已に其の力の為し能うだけを尽くして貧民救助、孤児高養を為しつつあり。日本の教会は決して信仰と仁恵を二にせざる也。日本教会は已に救世軍の為さんと欲する所を為せり。唯だ勇躍、興奮、一遍上人の如き態を為さざるのみ。若し足らざる所ありと云わば、是れ日本教会の為さざるにあらず。力足らざる也。日本国民は救世軍の厚意に謝すべし。然れども屋上屋を重ねるの要を見ざる也」（佐波亘編『植村正久と其の時代 第二巻』〔教文館、1938年〕662頁）

116 「先年の事なりき、仙台辺に救世軍とか云えるもの五六輩出現せしとの報ありしが、仔細に之を聞き糺せば、似たるは名のみにて、吾等の驚奇心は稍や失望を免れざりしなり」（同655頁）。

ちなみに、島貫は山室軍平と学生時代から親密な交流があった（相沢源七『島貫兵太夫伝』59頁など）。

117 『救世』第2次第5巻第79号（1909年）。

118 『救世』第2次第5巻第62号（1908年）。

119 『救世』第2次第6巻第89号（1910年）。

120 同。

121 『救世』第2次第4巻第68号（1908年）。



たことが、彼の思想における独自性であるとは言えるが、それは思想と呼ぶにはあまりにもシンプルに過ぎるであろう。

思想的深さの追及は、島貫自身がそれを確信犯的に放棄しているので仕方ないとしても、彼の苦学力行→成功、という、根幹にある思想、そしてそれに基づいた力行会の活動も、今日的な視点からすると無条件で受け入れることはできない。あまりにもシンプルで素朴で無邪気であるし、楽観的でポジティブ過ぎるし、下手をすると弱者自己責任論と受け取られかねない。

実は島貫自身も、苦学の成功者はごく一握りであることは認識していた。『日本力行会』という苦学生に職業を紹介し援助する組織が設立されたのは明治三十年のことである。明治末までの会員は一万五千人ともいわれている。会長は、多くの苦学生に職業を斡旋した経験から、苦学は百人に一人しかその初志を貫徹しないとまでいいきっている。日本力行会自体が日本では苦学は困難とみて、苦学生を海外へ派遣することに目的を変化させた。このことがなによりも苦学の困難さを示している<sup>122</sup>。

この、苦学の困難さが、島貫の目を渡米へと向けさせることになるのだが<sup>123</sup>、実際はアメリカ留学というキャリアは日本での成功には役に立たなかったし<sup>124</sup>、また、「渡米者の多くがゴロツキになり、ジャップ・スケベと蔑視されて日本の恥をさらしているとか、たとえ苦学が成功してもホテルの通訳ぐらいが関の山だとか、アメリカは拝金宗だけで文化的に見るべきものはない、といったものが、ほかならぬ渡米論のなかで強調するものがあるほどいきわたっていた<sup>125</sup>」というのが現実だったのである。

## B 島貫再評価の手がかり

### ①社会主義でない社会实践

では、我々はどこに島貫最評価の手がかりを見出すべきであろうか。一つの手がかりとなると考えられるのは、彼の社会問題との関わり方である。

『近代日本とキリスト教』の中で、山谷省吾氏が「教会の中ではオーソドックスの立場をとっている人も、社会事業の必要は感じていたし……ある人々は実行していましたね」と語ったのに対し、小塩力氏はこう応じている、「社会的な自覚を更に深めての指導者層ということになると……とくに海老名弾正の本郷の教会から輩出したでしょうね。そして、そういうことが、植村先生を反撥せしめたとまではいえませんが、富士見町を牙城として、もっと純福音的にやるべきだ、というふうに傾かしめたでしょうね。その結果は……『教会』を形づくるということによって、日本の国と日本の歴史とに、つかえたのでしょ、かなしいことに、日本の国土や庶民からうきあがっていった。こういうことは言えるのではないかと思います。したがって、それは、福音と教会との、ほんとうの純粹化ではなく、一種の精神主義的抽象になりやすかったと、言わなければならないと思います。勿論、逆に、社会的な方向にすすんだ人々は、しだいに教会から離れ、福音の信仰から遠ざかっていってしまいました。……その責任

122 竹内洋『立身出世主義』148頁。

123 例えば、キンモンス『立身出世の社会史』171頁以下でも、渡米が、国内での成功に失敗した若者たちの「代替ルート」であったことが指摘されている。

124 キンモンス『立身出世の社会史』176頁。

125 立川建治「明治後半期の渡米熱——アメリカの流行」（京都大学文学部史学研究会『史林』第69巻第3号）104頁。



は、教会の固陋にもありましようが、かれらの信仰が、イエス・キリストとその贖罪の真理の本質に触れていなかったのではないかとも思われます。そこに、かなしい乖離や分裂の固定化が生じたのでしょいうね。」<sup>126</sup>。ここで指摘されている問題は、今日なお解決されていないどころか、いよいよ深刻化しているとすら言える。否むしろ、社会派對福音派という今なお繰り返されている図式が、教団紛争を越えて、すでに明治時代にはプロテスタント・キリスト教会の中に出来上がっていたということに我々はいささかの驚きと当惑を覚える。

しかし、この観点からすると、島貫と力行会とは、排除の対象とはならないはずなのである。すでに指摘した通り、成功できないのは努力が足りないからだ、とは、当時でも単純には言い切れず、いくら努力しても成功できないようにさせる社会の仕組みという問題があったのであり、そのことに気付いた人々は、例えば繰り返し名前を出している片山潜に代表されるように、立身出世主義から社会主義へと鞍替えした。「かれら [=社会主義者たち] は、平民社設立 [1903年] 頃までは『立身出世』や『成功』に健康な明るさを含み、啓蒙主義的な成功主義を唱えたが、しだいに、貧民の子弟は高等教育機関に入学できないこと、出世と努力、勤勉、誠実にはなんの関係もないことつまり、『今日の社会組織上の欠陥』を説くようになった」<sup>127</sup>。島貫もそのことには気づいており、そのような、社会の仕組みによって挫折していく若者たちを「社会主義の卵」と「慨然と」記者に対して語っている<sup>128</sup>。島貫自身は、「キリスト教伝道事業と社会問題とは決して無関係の者と見なし冷々淡々に看過すべき筈あるべからず。此の後には益々此の両者間に密接なる関係生ずべきは必然の道理也」<sup>129</sup>と語っており、社会問題に無関心ではなかったが、しかし社会主義運動を含め、社会改善による問題解決については懐疑的だった。「社会の組織を変更せよと云うも又不平の歓声にして到底實際行はるべきものにあらざるなり。古より今日に至るまで随分社会の組織の不可なるを唱え幻夢的の国家を組織せんと企てたるもの多かりしも尽(ことごと)く実行の好蹟を奏せしものある事なかりしなり。……是れ一種のユートピアにして斯くの如きは到底人類社会に望むべからざる事たるなり。黄金時代を待ち望むは正に基督信者の正しき信仰なりと雖も吾人は到底此の地球上の時代に之を實現せんとは企てざるなり」<sup>130</sup>。つまり、島貫自身は、確かに貧困という社会問題と取り組んだが、いわゆる社会主義とは無縁であり、また、教会から離れることも決してなかった。神田教会を辞任せざるを得なくなった後も、彼はただちに力行教会という単立教会を建て、牧会を継続している。従って、小塩氏が言うような批判は、島貫と力行会にはあてはまらないはずなのである。

## ②日本キリスト教史の捉え直し

実は、本論を執筆するにあたり、島貫が排除され、現在なお黒歴史となっている理由を明らかにする、ということも、課題の一つとして最初は設定していた。しかし、正直に告白すると、どうしても納得で

126 久山康編『近代日本とキリスト教 明治篇』248頁。

127 竹内洋『日本人の出世観』48頁。

128 朝日新聞1910年5月30日号。

129 『救世』第1次第5号。

130 同。



きる原因や理由を特定することは出来なかったのである。

本論を執筆するにあたり、ずいぶんたくさん日本キリスト教史に関する著作にあたったが、島貫と力行会は、まるで放送禁止用語であるかの如く、まったく書かれていなかった。そして、そこまで冷遇される理由も、一応浮かび上がって来たのは、彼が植村正久や、アメリカ・ドイツ改革派教会の宣教師とその流れをくむ人々から排除されたことくらいである。しかしその排除も、果たして本当に正当なものであったか、と問われると、そうは簡単には言えない。

もしかしたら現代の日本キリスト教史は、その最初から社会派と福音派との争いがあったことを引きずり、今なお社会との取り組みを正当に評価することができないままなのではないだろうか。そして、島貫と力行会も、正当な位置付けが出来ないままではいるのではないだろうか。そうだとしたら、島貫と力行会を再評価する試みは、ただ彼らを排除するだけで終わった明治期まで遡って、改めてその歴史を辿り直すような壮大な作業となる可能性があるだろう。

### ③失われた時を求めて

では、社会活動を最評価のきっかけとするとして、我々はそこからどのように再評価を進めていけるであろうか。島貫は、1913（大正2）年、47歳で亡くなっている。志半ばにして病に倒れた、早すぎる死であったが、それゆえに、洗練されていないものに特有の、プリミティブなエネルギーや衝動に満ちている（そしてそこに独特の魅力もある）、と言える。

片山潜はクリスチャンで渡米推進者、という、島貫と同じ立場に立っていたが、後に社会主義へと鞍替えしたことはすでに何回も触れた。また、島貫の死後、彼の親友であった酒井勝軍は昭和まで生きたが、その中で、アメリカへの失望や愛国心やキリスト教信仰などが無いままになって、日ユ同祖論という、日本を代表するトンデモ理論のオピニオン・リーダーとなっていった。

島貫は、早世したせいで、日本とアメリカ、教会と社会、といった、後に統合不可能になっていく両極性の悲劇的分裂を経験せずに済んだ、パウル・ティリッヒが言うところの「dreaming innocence」の状態のままでいた、と言える。もちろん、破たんの予兆はすでにあったが、しかし、それはまだ総合の破綻前の時代、まだキリスト教に何ができて何ができないか分からない、キリスト教が、あるいはキリスト教に、いろいろな意味で「夢を持てた」時代であった、とも言える。そこには、dreamingである以上、現実化のプロセスの中で「夢想」に過ぎなかったとばかりに諦められてしまうようなものも多く含まれているであろう。しかし、諦めるべきではなかった、捨てるべきではなかった夢もそこにはあったはずである。

例えば、古屋安雄教授は、日本のキリスト教の限界は、インテリにとどまり、一般庶民に入り込めなかったことである、としばしば語ったことを先ほど紹介した。その原因の一つとして、クリスチャンは現実的な欲求や欲望とは無縁な、浮世離れした人とならなければいけない、という空気が日本キリスト教史の中で作り出されてしまっている、ということもあるのではないだろうか。クリスチャン＝禁酒禁煙の真面目人間、というイメージも、この浮世離れというイメージの一環であろう。現実には、立身出世や成功に背を向けるという生き方は、出世を諦めた人か、高等遊民か、夢や希望を持たない、夏目漱石の『門』の主人公のような人か、いずれにせよ、実社会の最前線でバリバリがんばっている人には無



縁な生き方であろう。

また、そのこととの関連で、森本あんり氏は、「宗教の力は、男性の血をたぎらせる何ものに表現の導水路を与えることで発揮されるのである。アメリカのキリスト教が他の文化圏に比べてなぜ現在も活発であり続けているかを理解する鍵も、ここに潜んでいるように思われる」<sup>131</sup>と論じているが、日本の教会は残念ながらそうではない、ということは認めざるをえないであろう。島貫と日本力行会は例外的にそうであった、とはただちには言えない。しかし、島貫と力行会の再評価が、こうした、現代の日本のキリスト教会に欠落しているものを回復させるかもしれない、現代の日本のキリスト教会に欠落しているものを持っている、パズルのピースとなる可能性がある。

これは一例であるが、繰り返しになるが、島貫と力行会が日本キリスト教史において黒歴史の如く無視されている現状は、決して健全なものではない。植村と宣教師たちが彼を排除したことには、理不尽とばかりは言いきれない部分は確かにあるであろう。しかし、彼に対する否定は、例えば東北学院名誉教授（当時）出村彰教授の、次のような肯定の言葉によってバランスが取られるべきであろう、「『あなたがたの霊も魂も体も……守られるように祈る』（1 テサロニケ 5・23）この祈りに沿って生涯を尽瘁（じんすい）したのが、島貫兵太夫だった」<sup>132</sup>。我々はこれに、「木の善し悪しは、その結ぶ実で分かる」（マタイ 12・33）という聖句を付け加えることも出来るであろう。

最後に、本論はその表題に「試論」と付したが、現在東京都練馬区にある日本力行会の書庫には、まだ手付かずのまま埃をかぶっている資料（史料）が数多く存在する。無造作にファイリングされている明治期の資料がまだまだある以上、当方の小論は、まだ「試論」の域を出ないし、「日本の神学」の一環としての島貫再評価の試みは、道なお遠しである。しかし、どんな研究も最初は試論だったのであるから、本論をきっかけとして島貫と力行会の研究に手を付ける人が現れたなら、試論としての役割を果たせたことになるであろう。それは当方にとって大きな喜びである。

（あいざわ・はじめ）

フェリス女学院大学文学部准教授

131 森本あんり『アメリカ的理念の身体』（創文社、2012年）258頁。

132 復刻版『救世』カタログ（不二出版、2012年）。